

福祉現場に求められる養成校の教育

～福祉学科卒業生へのインタビュー調査から見てきたこと～

榎木 博之

1 はじめに

日本では少子高齢化の進行、共働きの増加等により高齢者分野では介護労働者の人材確保が、保育分野では待機児童の問題が大きな課題になっている。また、児童虐待、高齢者虐待、孤独死、行方不明高齢者、子どもの貧困などさまざまな福祉課題があり、それらの課題に関わっていく専門職の養成が急務となっている。しかしこれらの状況とは逆に、介護労働者や保育士の離職率は、他の職業よりも高く、福祉分野の人材不足は大きな課題となっている。これらの状況において、本学が福祉学科を設置し、社会福祉士・介護福祉士・保育士として、さまざまな福祉現場で活躍することの意味は大きいと考えられる。

身延山大学仏教学部に福祉学科が開設されて10年が経過した。この10年間で、56名の卒業生を送り出した。そして卒業生の多くは、社会福祉士・介護福祉士・保育士の資格を取得し、現在各福祉機関で活躍している。しかし福祉学科開設後、卒業生のその後の動向について、調査を行ったことがなかった。また、卒業生が福祉現場で業務を行う上で、本学での教育がどのような効果があったのか、また足りなかった点は何かについて検討したことがなかった。

本論では、福祉学科卒業生のその後の動向を明らかにし、また卒業生へのインタビュー調査をとおして、本学での教育が福祉現場での実践にどのような効果があるのか等を明らかにしていく。

2 福祉学科卒業生の進路状況

本学福祉学科は2005（平成17）年に開設し、2014（平成26）年で10年を迎える。その間に6期生（平成25年度卒）合計56名の卒業生を輩出している。56名の卒業生のコース別の内訳は以下のとおりである。

表2-1 福祉学科卒業生数

	福祉学コース (旧介護福祉コース)	こども学コース (旧児童福祉コース)	合計
1期生	1名	4名	5名
2期生	8名	8名	16名

3期生	8名	9名	17名
4期生	1名	7名	8名
5期生	2名	0名	2名
6期生	5名	3名	8名
合計	25名	31名	56名

卒業生56名のうち、社会福祉士・介護福祉士・保育士の資格を取得した者は以下の通りである。(表2-1)社会福祉士は国家試験に合格しないと資格取得できず、卒業時の取得率は5.4%に留まっている。一方、介護福祉士・保育士は卒業と同時に資格取得することができ、多くの卒業生が取得している。その中でも保育士は31名中30名が国家資格を取得している。残りの1名も、卒業後に保育士資格を取得したため、ほぼ100%保育士を輩出していると言える。

表2-1 卒業時国家資格取得状況

資格	社会福祉士	介護福祉士	保育士
人数	3名	17名	30名
割合	5.4%	68%	96.7%

※1 社会福祉士は福祉学科卒業生56名に対する割合

※2 介護福祉士は福祉学科福祉学コース(旧介護福祉コース)卒業生25名に対する割合

※3 保育士は福祉学科子ども学コース(旧児童福祉コース)卒業生31名に対する割合

卒業生56名の卒業時の進路については、56名中54名が卒業時に就職しており、就職率は96%と高い数字になっている。その中でも卒業生56名中45名(80.4%)が福祉学科での学びを活かして、医療・福祉関係機関に就職している。詳細は図1のとおりである。

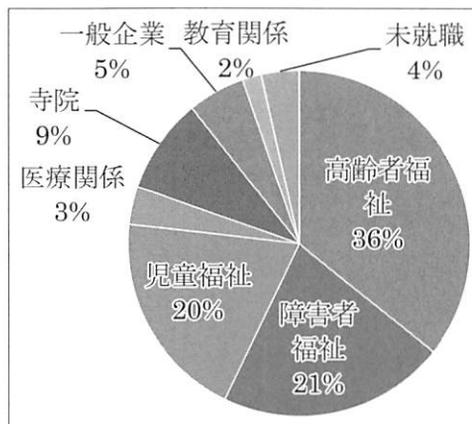


図1 卒業生就職先 (卒業時)

コース別の就職先を見ていくと、福祉学コース（旧介護福祉コース）では卒業生25名のうち医療・福祉分野での就職が22名（88%）である。内訳は図2のとおりで、高齢者福祉機関の就職先が多い。高齢者福祉機関では、全員が介護職として勤務しており、介護福祉士の国家資格を活かして就職していると言える。

一方、こども学コース（旧児童福祉コース）では、卒業生31名のうち福祉分野での就職が23名（74.2%）である。内訳は図3のとおりで、児童福祉施設、障害者施設での就職が多くなっている。児童福祉施設では、保育士の資格を活かして、保育所、児童養護施設、乳児院、児童館に就職している。また、障害者施設での就職も約4分の1と児童福祉施設に次いで多い。これは保育士だけでなく、社会福祉士国家試験受験資格を取得する上での実習体験で、障害者施設を経験していることが影響していると考えられる。

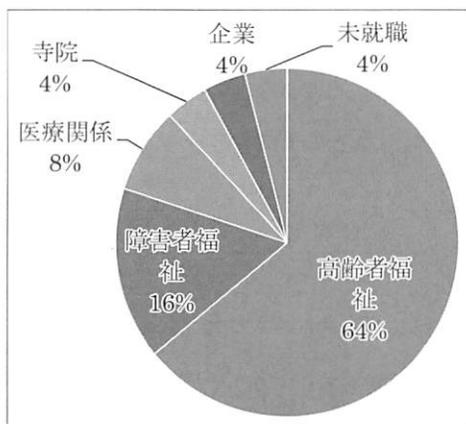


図2 福祉学コース卒業生就職先（卒業時）

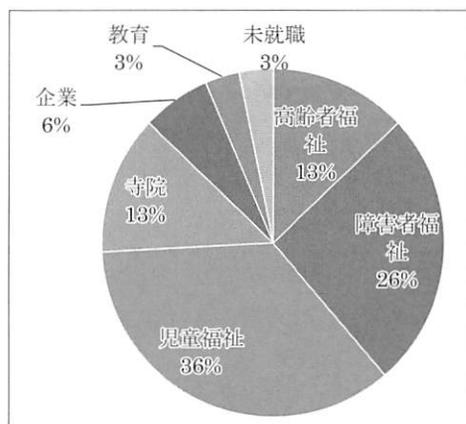


図3 こども学コース卒業生就職先（卒業時）

では、卒業して医療・福祉現場において働いている卒業生はその後、どのような就労状況であろうか。卒業後の就労状況について、平成25年度（平成25年7月調査）学生支援室で調査を行ったので紹介したい。調査は平成24年度に卒業した5期生まで（48名）を対象として、電話にて現在の就職先を確認した。

卒業時就職先に現在も就労している者は34名（70.8%）、卒業時就職先を退職した者は14名（29.1%）であった。（表2-2）

表2-2 卒業後の就労状況 平成25年7月現在 (N=48)

	卒業時就職先に 現在も就労中	卒業時就職先を退職し、 転職して就労中	卒業時就職先を 退職し、未就職	卒業後に就職して 現在も就労中	不明
人数	34名	8名	3名	2名	1名
割合	70.8%	16.6%	6.2%	4.2%	2.1%

厚生労働省の新規学校卒業就職者の在職期間別離職状況によると、大学新卒3年目までの離職率は、平成23年4月のデータで32.4%となっている。¹⁾本学の離職率は、5期生までのデータとなるため一概に比較はできないが、全国の大学新卒者と似た結果になっていると言えるだろう。

医療・福祉関係機関に就職した5期生まで37名のその後の就労状況は、入職した職場を退職した者が10名、離職した割合は27%となっている。(表2-3)

表2-3 卒業後医療・福祉分野に就職した卒業生の動向 (N=37)

	卒業時就職先に 現在も就労中	卒業時就職先を退職し 福祉分野に転職して就 労中	卒業時就職先を退職し福 祉分野以外に転職して就 労中	卒業時就職先を 退職し未就職
人数	27名	5名	2名	3名
割合	72.9%	13.5%	5.4%	8.1%

全国的には、介護労働安定センターの「訪問介護員・介護職員の1年間の離職率」は、平成25年度調査で16.6%としている。²⁾しかし、このデータは新卒後だけではないため、本学の離職率との比較は難しい。養成校卒業後に福祉機関に就職した後の離職状況についての調査はあまりないが、植草学園短期大学の調査では、「卒業生の殆どは介護福祉士および保育士・幼稚園教諭として就業し、就業率は平成21年度で99%、正規職員も87%と高い一方、3年目までの離職率は3割近くになっている」³⁾としている。本学のデータが5期生までで27%であることから、似た結果となっていることが分かる。

本学の退職した10名のうち、転職先も福祉分野を選択し、現在も働いている卒業生は10名中5名となっている。職場を変えても福祉分野で就労するものが半数いるということは、保育士や介護職といった福祉現場での職業が嫌になっただけではない者が多い、と言えるだろう。

この結果から本学福祉学科の卒業生は、卒業後も福祉分野で就労している者が多いことが明らかになった。では、本学での学びが、福祉分野での就労にどのように活かされているかを見ていきたい。

3 卒業生インタビュー調査

本学卒業生に、大学での学びが福祉現場での実践にどのような影響があるのかを明らかにするために、インタビュー調査を行った。対象者は、福祉学コース（旧介護福祉コース）、2名、こども学コース（旧児童福祉コース）4名の合計6名である。6名は卒業後に就職した職場に現在も就労していて、1年以上の就労経験を持つ者とした。また、現在の就労先が、高齢者分野2名（通所施設と入所施設）、児童分野1名、障害者分野3名（通所施設と入所施設）と各分野に就職した卒業生を選出した。

調査は平成25年5月から12月までの間に実施した。インタビューは①大学で学んだことが現在の職業にどのように活かされているか、②現在の職業を行う上で、大学で学んでおきたかったと感じたことは何か、の2つの質問を行い自由に回答してもらい、半構造化面接を行った。倫理的配慮として、対象者には事前に調査の趣旨を口頭で伝え、個人が特定されないことがないことを説明し、同意を得た。調査結果は以下の通りである。

① 大学で学んだことが現在の職業にどのように活かされているか

「大学で学んだことが現在の仕事に活かされているか？」の問いに対して、すぐに返答できずに考え込んでしまう者が何人かいた。その中で出てきた意見は以下のとおりである。

- ・ 「介護実習で行ったアセスメントの体験が、現在の仕事に活かされている。就職するとすぐにケアプランを作成しなくてはならず、学生時代に実習で体験したことは貴重だった」
- ・ 「仏教の勉強をしていたので、高齢者との会話が膨らむことがある。学生時代に仏教の勉強をしたことが、介護現場で役立った」
- ・ 「児童養護施設での実習や卒業論文作成で、現場の人の話を聞く機会があったのは現在も役立っている。子どもたちの言動の意味を教えてもらっていたので、子どもが何を思っているかを理解することができた」
- ・ 「学生時代に小規模施設の見学を行っていたので、その実態を事前に知ることが出来たのは良かった」

以上のような意見があった。大学で学んだことが現在の業務に活かされている内容は、実習や見学等、教室での講義ではなく自らが体験をしたり、直接見たり話を聞いたりしたことがほとんどであった。これは受け身の講義での学びよりも、自らが参加し能動的に学んだ方が印象に残っているからと言えるだろう。一方で、最後まで大学時代の学びと現在の仕事が結びつかず、意見を言うことが出来なかった者もいた。

② 現在の職業を行う上で、大学で学んでおきたかったと感じたことは何か

「現在の職業を行う上で、大学で学んでおきたかったこと」については、対象者全員が意見を述べた。①の問いには考え込んで意見が出なかった者も、②ではすんなりと言語化することができていた。出てきた意見は以下のとおりである。

- ・ 「ショートステイを利用する利用者さんの事前訪問に行く機会があるが、障害に応じた住環境について考えることが出来なかった」
- ・ 「大学を卒業しているので、おむつ交換や移乗介助などの介護技術も出来て当たり前の雰囲気があった。しかし学生時代には介護技術を十分に体験できず、就職してから苦労した」
- ・ 「就職する前に、福祉現場の雰囲気をしておくことは重要だと感じた」
- ・ 「就職したらすぐにケアプランを作成したり、記録を書かなければならず苦労した」
- ・ 「障害者のてんかん発作への対応や誤嚥の対応等、緊急時の対応について学んでいなくて、就職して戸惑った」
- ・ 「虐待を受けた子どもへの対応等、子どもの心のケアについてもっと学んでおけばよかった」
- ・ 「就職すると、考えて自分の意見を言う場が多くなる。会議の場でも自分の意見を言わなければならない。考えること、それを言葉にすることに苦労している」

以上のような意見があった。これらの意見は、福祉現場に就職して苦労したことになるので、実感がこもっていた。意見の中で出てきた、「介護技術の体験」、「ケアプラン作成や記録」「子どもの心のケア」「緊急時の対応」については、平成21（2009）年以降のカリキュラム改変により、本学においても学ぶ機会を確保している。

実践が求められる福祉現場において、「考える力」「言語化する力」「実践する力」が求められていると言える。これらの力を福祉現場に就職してからではなく、大学に在学中から身につけるような教育が求められているのではないだろうか。

4 今後の福祉学科に求められること

本学福祉学科卒業生の多くは、大学で取得した資格を活かして福祉分野で就労している者が多いことが明らかになった。そして卒業生へのインタビュー調査から、大学での学びは講義よりも自ら体験する能動的な学習のほうが現在の業務に活かされていることが明らかになった。また、大学での教育で足りなかったこととして、「考える力」「言語化する力」「実践する力」を身につけておくことの必要性も明らかになった。これらの声を今後の本学福祉学科での教育に取り込んでいかなければならない。

本学では平成26年度より、タブレット端末を使ったアクティブラーニングを導入している。しかし実際の福祉現場等で学生が自ら考え、行動する活動については福祉学科のカリキュラム

では明確になっておらず、個々の教員がゼミナール等で実施している。個々の教員の努力に委ねられている状況である。そのため今後、福祉現場等での活動をアクティブラーニングとしてカリキュラムに位置付けていくことが必要ではないかと考える。大学での学びの時に、福祉現場での実践につながる「考える力」「言語化する力」「実践する力」を身につけるカリキュラム編成を今後、検討していきたい。

本調査においては、インタビュー調査を6名に限定しており、全ての卒業生を対象としていない。そのため今回の結果が、卒業生全ての意見とは言えない。また卒業生からの意見を聞くのみに留まっているため、就労先の声は聴いていない。そのため本調査の結果は一部に過ぎない感は否めない。平成27年度は全ての卒業生に質問紙調査を行い、また就労先の声もインタビュー調査で聞きながら、本学に求められる教育をより明確にしていきたいと考えている。

本調査に協力していただいた卒業生には感謝いたします。ありがとうございました。

注

- 1) 厚生労働省 「新規学校卒業就職者の在職期間別離職状況」新規学卒者の離職状況に関する資料一覧
- 2) (公財)介護労働安定センター 「平成25年度介護労働実態調査結果について」
- 3) 今井訓子・川村博子・漆澤恭子・黒田静江・松本和江・橋本三枝子・田中幸「卒業生への就業継続支援に関する調査研究」植草学園短期大学研究紀要 第14号 P21

執筆 者

望月海慧 (本学仏教学科教授)

金 炳坤 (本学仏教学科特任講師)

桑名法晃 (立正大学大学院生)

椿 正美 (本学非常勤講師)

北村愛子 (本学福祉学科特任教授)

佐々木さち子 (本学福祉学科特任講師)

榎木博之 (本学福祉学科准教授)

平成二十六年十月十三日 発行

身延山大学仏教学部紀要 第十五号

発行 者 池 上 要 靖

印刷・製本 山 喜 房 佛 書 林

発行 所 身 延 山 大 学 仏 教 学 部

〒 四〇九―二五六七

山梨県南巨摩郡身延町身延三五六七

電 話 〇五五六―六二一〇一〇七